

## 平和をつくる者たち

(マタイ5・9)

### 一、はじめに

マタイの福音書5章9節に「**平和をつくる者は幸いです。その人たちは神の子どもと呼ばれるからです。**」とありますが、ここで語られている幸いは、「そうならない」という、「イエスさまの教え」なのでしょいか。あるいは「キリスト教の教え」なのでしょいか。もし「教え」であると受け取りますと、どれをとっても立派な教えであると、ほとんどの人が認めると思います。「**平和をつくる者は幸いです**」と聞いて、あるいは読んで、「自分もそうしよう」と思う方はたくさんおられると思います。「これこそ、キリスト教主義だ」として、絶賛する方も多いと思います。ですがイエスさまは、「こっしなさい」という教えとして、語っておられるのではないと思います。なぜなら平和をつくることは、たいへんに難しいからです。よく耳にすることばに、「平和運動を一所懸命にやっている人たちに、平和的でない方が多い」というものがあります。私もそう思います。「戦争反対!」と積極的に語る人たちは、平和の大切さを訴えているのでありましょが、その主張の根底にあるのは「ある思想」です。思想を抛り所にしますと、自分たちの

主義主張に合わない方がいると、敵意をむき出しにするようになります。

私は思うのです。世界には様々な宗教があります。そうしますと、キリスト教会はほとんどの場合に、迫害される側になります。その理由は、信仰のスタイルこそ様々であっても、イエスさまの教えに聞き、神を礼拝していますと、過激な思想になりにくいからだと考えています。私たちは、教えや主義によって生きていくのではなく、生けるイエスさまとの交わりの中に生かされています。そういう私たちではありませんが、何かの平和思想が入って来て、「自分たちに賛同できないキリスト者たち、それが過激になって行きます」と一とかく熱心になって、そのような傾向になって行く牧師たちが、アッセンブリー教団以外に散見されますが、多様性を認めない教会になって行き、牧師とその賛同者、そしてそう思わない信徒さんたちの間で軋轢あつれきが生まれることがあります。

### 二、平和をつくる者とは

改めて5章9節をご覧ください。「**平和をつくる者は幸いです。その人たちは神の子どもと呼ばれるからです。**」と主イエスさまは語られましたし、今も、時代を超えたことばとして語っております。 **平和をつくる者** ですが、元

の単語は、「平和」と「つくる」が一つに組み合わされていることばです。結論から申しますなり、こつだと思いません。「私たちに、平和をつくることばではない。神であり、人であり、罪を贖ってくださる主イエス・キリストとの交わりに生かされている者たちが、平和をつくる者たちになる」と。

先ほども申しましたが、世界には様々な宗教があります。そうしますと、キリスト教会はほとんどの場合に、迫害される側になります。そうではあつても、平和思想なるものが教会に入つて来て、「自分たちに賛同できないキリスト者たちはまちがっている」となりますと、教会が変質して行きます。それをもって異端になるのかと言いますと、そういう次元のことではなくて、純朴な信仰を持っていた牧師たちが、ある時から、社会的に過激な発言をするようになります。もう一度申しますが、それは、異端になるとかそういう次元のものではありません。

キリスト信仰とは、イエスさまを救い主と信じて、イエスさまとの交わりの中に生かされる信仰です。その特徴は、イエスさまに似て行くことです。イエスさまのようになって行くものです。

### 三、イエスに似た者とされる

イエスさまを信じ続けますと、イエスさまに似た者とされて行きます。コ

リント人への手紙第二章18節にあるようにです。では、イエスさまを信じ続けると、どのような姿になるのでしょうか。地上における神の子イエス・キリストの御姿を想像したら、分かります。イエスさまが地上におられた時、どのような方だったでしょうか。怒られることはあつたでしょうか。ありました。ですが少なかったと思われます。笑われたことはあるでしょうか。ルカの福音書10章21節を見ますと、私には笑つておられる姿が思い浮かびます。もちろんゲラガラではありませんが、では、ふだんはどのような表情をされていたのでしょうか。どちらかと言えは、うつむき加減で、人々の痛みを思っている姿だったように、思われます。もし私の観方みかたが当たっているとすれば、教会の人たちも、個人差はあつたとしても、そのような表情になるかと思ひます。

神が救い主として遣わしてくださいました主イエス・キリストと、交わり続けることによつて、私は、あなたは、そして私たちは、名実めいじつともに「平和をつくる者たち」「神の息子・娘たちと呼ばれる」ようになります。私共は、キリストの教えを守ることに重きを置いて、生きていくのではありません。キリスト教的な平和思想を胸に抱いて、生きているのではありません。実に、主イエス・キリストとの交わりに生かされている者たちです。